京都市立美術工芸高等学校
卒業生インタビュー

平成23年卒業
九谷焼絵付け

太田 恵利香

「赤絵細描作家として
歩むいまも、美工が原点」

「美術に関係する仕事に就きたい」

中学の頃から絵を描いたり物を作ったりするのが好きで「美術に関係する仕事に就きたい」という漠然とした夢はあったのですが、それがどういう仕事か全く定まっておらず、どの高校を受けるか大変迷った記憶があります。
そんななか美工の存在を知り、運試しのような形で受験。無事合格し、勉学に励みました。

美工ではデッサンの基礎から各専攻の専門的な技術までしっかりと学べるので、自分のやりたいことを定める貴重な経験ができました。
私は陶芸を専攻し、京都精華大学の陶芸コース（当時）へ入学、卒業後陶芸の絵付けの専門学校へ進み、絵付けが盛んな九谷焼の世界へと入りました。

九谷焼は成形と絵付けが分業のところが多く、私は絵付け師として企業へ就職したのですが、絵付けだけでなく、轆轤やタタラなどの成形も一通り勉強することができていたので、その知識や経験を仕事に役立てることができました。

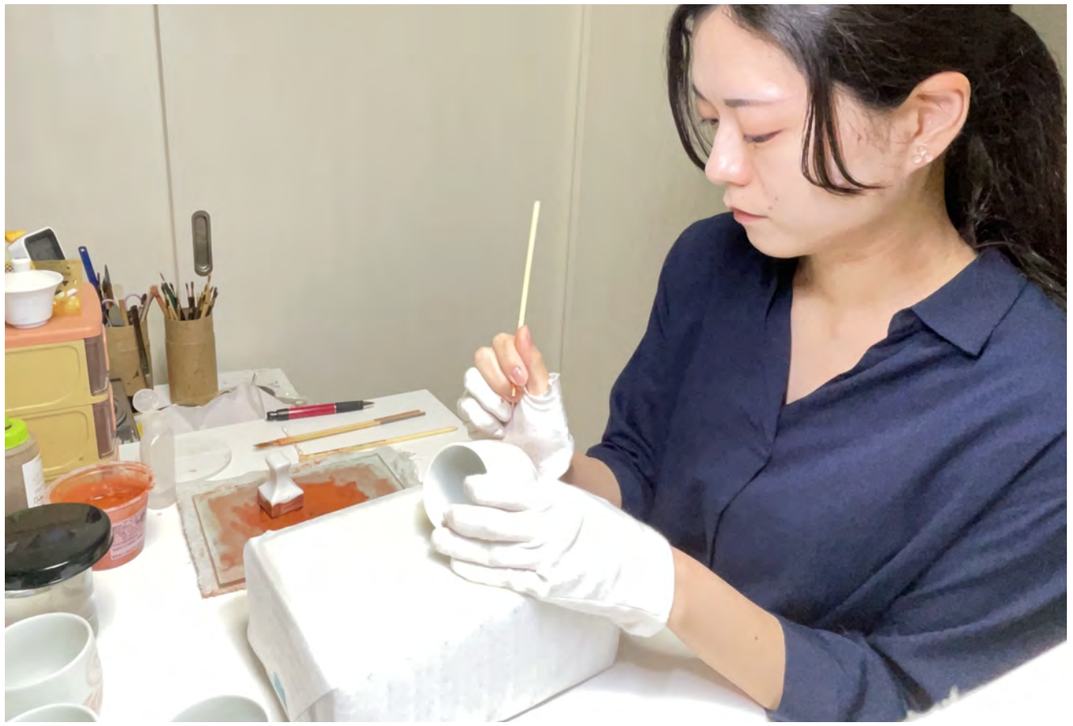
また、高校のころから同じ道を志す仲間とともに学び講評をしてきた環境は、自分の作品の説明や商品開発の際の発言力を鍛える経験になっていたように思います。

私が作品を制作するとき意識していることは、昔から伝わる技術を現代に繋いでいくことです。私が主に制作している赤絵細描という技法は、一度途絶えた歴史があります。現在は復興し、各作家さんによって作品が制作されていますが、素晴らしい技術も繋いでいく人がいなければ途絶えてしまう、それは大きな損失だと感じました。私が今まで学んできた技術、意匠は先人が積み上げて繋いできたもので、その恩恵を受けた私自身も、後世への繋がりの一部になりたいと思っています。

何よりも大切なのは基礎だと痛感

現在は作家として自分の作品を発表しています。作家というと自分らしさ、オリジナリティが大事にみえますが、それらを表現するのに何よりも大切なのは基礎だと痛感しています。そしてその基礎を築けたのが、美工で学んだ日々でした。

自分の頭の中のイメージを絵や文章でアウトプットする際、うまくいかずもどかしい思いをしたことはありませんか。それはアウトプットするための武器が少ないのかもしれません。どんなに素晴らしいアイデアや発想があってもそれを表現することができなければ世に発信することができません。形を表現するためのデッサン力、デザインを考える発想力、先人の作品から学びを得る知識力など様々な武器を持っているほど自身の表現の幅は広がっていきます。美工で学んだことは今でも私の制作において基礎の一部として息づいています。

高校から専門の道へ進むことに悩む人もいるかもしれません。しかし悩むということは、自分の中にやりたい気持ちが少しでもあるということだと思います。人生の選択をしていく中で思い描いた結果にならなくても、道中の経験はどこかで必ず役に立つ時が来ます。そんな経験が美工ではできたと私は実感しています。

何かに挑戦したという事実はどんな形であれ自分の経験になり得ます。中学生のみなさんにはぜひ美工で自分のやりたいことに挑戦してみてほしいです。